


## ■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。  
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

**\*** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

**CC** : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。  
無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Today OCW 学術俯瞰講義  
Copyright 2013, 中島隆博

The University of Tokyo / Today OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series  
Copyright 2013, Takahiro Nakajima

2013年度夏学期学術俯瞰講義

# 社会と倫理

〈人間〉の限界を問う

## 共生の倫理 I 災厄に面して

中島隆博(東洋文化研究所)

# 目次

- ▶ 1 何を、何を、責める？
- ▶ 2 悪＝災厄の自然化？
- ▶ 3 人格神
- ▶ 4 災異と天譴の思想
- ▶ 5 天譴説批判
- ▶ 6 壊れた天
- ▶ 7 人妖

# 1 何を、何を、責める？

▶ 和合亮一『詩の礫』

▶ この震災は何を私たちに教えたいのか。教えたいものなぞ無いのなら、なおさら何を信じれば良いのか。

2011年3月16日4:34

▶ 何に、何に、怒る？何を、何を、責める？ある役人の長が誤って発言した、「原子力の問題は神のみぞ知る」。ならば、神か。私は心に雨を降らせながら、魂に冷たい汗をかく。もしくは限界である。2011年4月1日

22:21

# 1 何を、何を、責める？

▶ 和合亮一『詩の礫』

▶ 余震。地の波。私たちをあらためて追い立てる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも手を休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。四月七日、午後十時、余震。宮城県沖、震度6強。もはや、宇宙からの断罪。2011年4月9日22:56

# 1 何を、何を、責める？

- ▶ 和合亮一『詩ノ黙礼』
- ▶ 放射能という我が幽霊。(142頁)
- ▶ 石原慎太郎「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を1回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」。(2011年3月14日)
- ▶

## 2 悪＝災厄の自然化？

- ▶ アンダースとアーレントは、まったく悪意が存在しなくても悪はおこないというスキャンダル、まったく悪意がなくても途方もない責任が生じうるという点を指し示していました。われわれが持つ〈道徳〉という範疇は、悪が想像可能な範囲を超え出てしまうと、悪を描写したり裁いたりできなくなってしまうのです。そして、次のように述べる以外になくなってしまいます。「大きな犯罪は自然を害い、そのために地球全体が報復を叫ぶ。悪は自然の調和を乱し、罰のみがその調和を回復することができる」(Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil*, Revised and enlarged edition, New York, Penguin Books, 1977, p.277. (『イエルサレムのアイヒマン』大久保和郎訳、みすず書房、1969年、221 頁)と。

## 2 悪＝災厄の自然化？

- ▶ ヨーロッパのユダヤ人たちは、「ホロコースト」という語の代わりに「ショアー」という語を用いるようになりました。「ショアー」は、自然のカタストロフィーという意味であり、とりわけ津波という意味ですが、この変更は、自分たちが被害者であったり責任者であったりする事柄が思考の域を超えてしまうと、悪＝厄災を自然のものとしたくなる。そうした誘惑を示しているのです。（ジャン＝ピエール・デュピュイ「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園——ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ——」、UTCP講演会原稿、2011年6月30日、4～5頁）

### 3 人格神

- ▶ アルバート・アインシュタイン
- ▶ 人類の精神的進化が未熟だった時期に、人間の空想力は人間の像を持つ神々を創造しました。その神々は、自らの意志を働かせて、現象の世界を決定したり、あるいはそれに影響を与えるものと考えられたのです。人間はその神々の気質を、呪術や祈禱によって思い通りに変えようとしてきました。現在説かれている諸宗教における神の観念は、この神々という古い概念の昇華したものです。その擬人的な性格は、例えば人々が、祈りの中で神に訴えたり、自分の願望を叶えてくださいと歎願する事実を示されています。

### 3 人格神

- ▶ あまねく恩恵を垂れ、全能で正義の人格神が存在するという観念が、人間に慰め、助力、導きを与え得ることを、確かに誰も否定しようとはしないでしょう。またその観念が単純なために、それはどんなに蒙昧な人々にも近付き易いのです。しかし一方、その観念自身には、決定的な欠点が附随しています。それは歴史が始まって以来、痛ましくも感じられてきた欠点なのです。

### 3 人格神

- ▶ それは、もし神が全能であれば、あらゆる人間の行動、思想、感情、抱負をも含めたすべての出来事が、やはり神のみ業であるということになり、そうすれば、そのような全能の存在の前に、人間が自らの行為や思想に責任を負わねばならないとは、どうして考えることができるのでしょうか？神が処罰や報賞を行われる時には、ある程度まで神は、自分自身に審判を下していることになりましょう。このようなことは、神に帰せられている善良と正義ということと、どうして宥和させることができるのでしょうか？

# 3 人格神

- ▶ 宗教と科学の二領域間に見られる現在の紛糾の源泉は、この人格神という概念にあるのです。(アルベルト・アインシュタイン「科学と宗教」、『晩年に想う』、32～33頁)

## 4 災異と天譴の思想

- ▶ 災異：
- ▶ 成帝河平三年（前二六）の二月丙戌、犍為郡（四川省）の柏江山が崩れ、捐江山も崩れた。ともに長江の流れをふさぎ、長江の水は逆流して城郭を破壊し、十三人の犠牲者を出した。大地の震動が二十一日間つづき、百二十四回にわたって震動した。元延三年（前一〇）の正月丙寅、蜀郡（四川省）の岷山が崩れ、長江をふさぎ、長江の水は逆流して三日後にようやく疎通した。（『漢書』五行志）

## 4 災異と天譴の思想

- ▶ 天譴:
- ▶ 劉向はつぎのように考える。周の時代に岐山が崩れ、三つの川が干あがって幽王が亡んだ。岐山は周王朝の発祥の地である。漢王朝はもともと蜀漢の地よりおこった。いま発祥の地の山が崩れ川が干あがり、彗星がまた摂提星、大角星にまで尾を引き、参星から辰星にまでまたがっている。必らずや滅亡するにちがいない。その後、三代にわたって跡継ぎがなく、王莽が帝位を篡奪した。(同)

## 4 災異と天譴の思想

- ▶ 天譴は治者に下る:
- ▶ 五行志の中心をなすのは、天人相関ないしは天人感応とよばれる思想である。人間の行為、といってもそれはもっぱら帝王や諸侯などいわゆる人君の行為にかぎられるのだが、その人間の行為にたいして天が敏感に反応するという思想である。すなわち、この世に出現するさまざまな災害や怪異の現象は、人間の行為になにかまちがいが生じたために、それに「応」——反応した天が、「戒」——いましめとしておくりとどける「象」——シンボルないしサインにほかならない。  
(吉川忠夫)

## 5 天譴説批判

- ▶ 儒者の説にまた言う。「君主が失政を行えば、天が異をなし、改めなければ人民に災いし、さらに改めなければ自分の身に災いする。異を先にして、災を後にするのは、教を先にし、誅を後にするという意味である」。
- ▶ しかし、これもまた疑わしい。夏に物を植えても、物は枯れて育たないし、冬に穀物を取り込んでも、穀物は棄てられて収蔵できない。そもそも政治や教化を行うのは、ちょうど物を植えたり、穀物を取り込んだりするようなもので、政治が時宜を失すると、気や物が災禍をなしてしまおうと言えるだけである。「天が異をなして譴告し、改めなければ災をなして誅伐する」と言うことはできない。

## 5 天譴説批判

- ▶ 儒者の説は、俗人の言である。陽の気が熾烈な真夏に、陰の気が陽の気を犯すと、雷が起こり、それが人や物に当たって殺すことがあると、それを天が隠れた過ちを罰すると言うのである。一度聞くとそうであるかのように思うが、実際はそうではない。そもそも災異が譴告や誅伐をなすと言うのは、ちょうど雷が人を殺して隠れた過ちを罰する考えるようなものだ。理由のない言葉であり、そうだとは言えない説である。(王充『論衡』譴告)

## 6 壊れた天

- ▶ 韓愈が柳宗元に言う。「あなたは天の説を知っているだろうか。わたしがあなたに天の説を語ってみよう。今、病み、痛み、疲れ、辱められ、飢え、寒さにふるえること甚だしい人がいるとしよう。そのことから、その人は仰ぎ見て天に呼びかけ、こう述べる。「民を損なう者が栄え、民を助ける者が亡びる」。さらに仰ぎ見て天に呼びかけ、こう述べる。「なぜこのように暴虐極まりないことが生じさせたのか」。このような人はまったく天を知らない。

## 6 壊れた天

- ▶ そもそも果物や瓜のような飲食物が腐ると、虫がわく。人の血気が腐り、逆流し、詰まり、滞ると、できものやかさ、いぼやこぶ、はれものや痔ができ、虫がわく。木が枯れると木喰い虫が巣くい、草が朽ちると蛍が飛ぶ。これらは壊れてその後に出現したものである。物が壊れると、そこから虫がわくように、元気や陰陽が壊れると、そこから人が生まれるのである。虫がわくと物はますます壊れる。喰い嚙ったり、穴をあけたりと、虫が物に与える災禍はいよいよ甚だしい。

## 6 壊れた天

- ▶ そこで、虫を取り除くことができる者は、物に対して功績ある者であり、虫を繁殖させてしまう者は、物の仇である。人が元気や陰陽を壊すことも、いよいよ甚だしい。原野を開墾し、山林を伐採し、泉を穿ち井戸水を飲んだり、墓を掘って埋葬したり、また穴を掘って便所を作ったり、土を高く盛って垣根や城郭、高殿や物見台を建てたり、流れを切り開いては川や水路や溜池を造ったり、さらには木で火をおこして燃やし、金属を熔かし、焼き物を作り玉を彫琢している。憔悴して天地万物はその真の姿でいられず、右往左往、攻められ損なわれ崩され撓められ、息つくことができない。人が元気や陰陽に与える災禍は、虫がもたらすものよりも甚だしいのではないだろうか。

## 6 壊れた天

- ▶ わたしの考えでは、こうした人を削って日ごと年ごとに減らすことができれば、元気や陰陽に与える災禍は、どんどん少なくなる。これが天地に対して功績ある者であり、人を繁殖させる者は、天地の仇である。今、人はまったく天を知らないために、天に呼びかけては天を怨んでいる。わたしの考えでは、天がその呼びかけと怨嗟を聞けば、功績ある者に褒賞を与えること必ず大であり、災禍をなす者に処罰を与えることもまた大であるはずだ。あなたはわたしの説をどう考えるのか。(柳宗元「天説」)

## 7 人妖

- ▶ 星が墮ち木が鳴ると、国中の人々はみな恐れて、「これはいったい何であるのか」と言う。それに対して答える。「何でもない。それは天地の変であり、陰陽の化であり、まれに起こる事柄である。これを怪しむのはよいが、これを畏れるのはよくない。日や月に蝕が生じ、時ならずして風雨が襲い、怪星がたまたま現れるのは、どんな世でも常にあることだ。君主が明らかで政治が公平であれば、こうした変異が世に何度起こっても害はない。しかし、君主が暗愚で政治が不公平であれば、こうした変異が一度も起こらなくても益はない。星が墮ち木が鳴るのは、天地の変であり、陰陽の化であり、まれに起こる事柄である。これを怪しむのはよいが、これを畏れるのはよくない。

# 7 人妖

- ▶ はなはだ起こる事柄では、人妖(人間による妖怪)を畏れるべきである。粗雑に耕して作物を損ない、いい加減な除草で収穫を失い、政治は不公平で民を失い、田畑は荒れて作物が育たず、買い付けた米の値段が高く民は飢え、路上に死者がいる。これを人妖という。政令が明らかでなく、事業は時宜を得ず、農業は整備されず、労役も時宜を得ず、牛が馬を生み、馬が牛を生み、家畜が奇怪なことをなす。これも人妖という。礼義が修まらず、内外に別なく、男女は淫乱で、父子が互いに疑い、上下が乖離し、外敵が次々に襲ってくる。これも人妖という。

# 7 人妖

- ▶ 妖怪は[人の]乱より生まれる。以上の三つの人妖が交わると、安泰な国はない。この人妖の説ははなはだ身近なものであるが、その災いははなはだ大きい。怪しむべきであり、畏れるべきである。古伝に、「万物の怪は記録に書いても原因を説かない。無用の弁や不急の察は棄てて治めない」とある。君臣の義、父子の親、夫婦の別は日々切磋して捨て置いてはならない。  
(『荀子』天論)

# 参考文献

- ▶ アルバート・アインシュタイン『晩年に想う』、中村誠太郎・南部陽一郎・市井三郎訳、日本評論社、1950年
- ▶ 和合亮一『詩の礫』、徳間書店、2011年
- ▶ 和合亮一『詩ノ黙礼』、新潮社、2011年
- ▶ ジャン=ピエール・デュピュイ「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園——ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ——」、UTCP講演会原稿、2011年6月30日
- ▶ 中島隆博『悪の哲学 中国哲学の想像力』、筑摩書房、2012年